



夜月飛行

—眠れない日にはお月さんを眺めましょう。ほら、だんだん眠くなる眠くなる……

眠れない夜には月をみる。夢海がまた小さい頃の話である。

寝付きが悪かったとき、幼子だった夢海は母に連れられて月の下、温かな腕に抱かれて揺られていた。母の穏やかな声音に導かれ、空に浮かぶ月の柔らかな明かりに包まれていると、泣いて止まなかった幼子は、麻酔が効いたかのように眠りに落ちていった。そのときの心地は気持ちが良いもので、彼女は普通に寝てしまうことを嫌がった。母はそんな彼女を無理に寝かしつけることは決してせず、どんなときでも愛おしく抱き上げて、夜月の下、彼女が眠りにつくまで過ごしていた。

いつの間にか母も子も、この夜のひとときを何よりも楽しみとしていた。頻繁に夜月の下を二人で手をつないで散策し、夜が更ける頃には夢海は夢の中を微睡んだ。

夢海が小学生に上がる頃、母は病死した。母親の若すぎる死に、皆が悲しみに暮れた。父親は大分前からこの日のことに覚悟を決めていたのだが、現実を目の当たりにしたとき、誰よりも涙を流して嗚咽した。一方で夢海は母の死というものをいまいち理解することができなかった。悲しい、寂しい—そんな思いは確かに胸にあるのだが、自分の母がいなくなったとはどうにも実感できなかった—ただもやもやした嫌な心地が渦巻いていた。彼女の様子を親戚や近所の人達は強い子だ、しっかりした子だと褒めた。

母が亡くなった日の晩、彼女は一向に眠ることができなかった。カーテン越しに射しこむ月明かりがぼんやりと部屋の輪郭を浮かび上がらせていた。眠れない日には—思い立って、そっと彼女は起きだし、父親に気付かれ

ないよう静かに外へ抜けだした。

真冬の空の下だった。一段と冷え込み、彼女は体を丸くした。周囲に目をやると家々の明かりはほとんどが落ちていて、虫の音ひとつもない。街灯の明かりは弱々しく点滅を繰り返すばかりで、不気味な闇が広がっていた。恐る恐る彼女は一步踏み出して、家の前の通りに出て行つた。

家から短い距離を行くと小さな公園がある。錆びついた鉄棒やブランコ、小さな砂場に小さなすべり台――住宅街の中にポツンと存在するこの公園を利用するのは近隣の少数の子供と老人ぐらいなものであった。十分も歩けば市営の自然公園があるため、この公園は半ば忘れ去られたように存在していた。

夢海はこの小さな公園が大好きだった。彼女は遊具や公園を囲む白壁に描かれていた絵がお気に入りだった――イルカやクジラ、シャチ、魚の群が星々の海を自由に泳ぎ回り、皆が丸い大きな月を目指している――彼女は絵を眺めては物語を紡いだ。その傍らには、いつも聞き手である母の笑顔があった。

「星々を泳ぎ回るイルカの背中に乗って、月に向かうの。月にはたくさんのお店屋さんがあつて、お店の人はみんなうさぎさんなの。七色の石を使ってお買い物をするのよ――」

夢海は静まり返つた公園内に入った。滅多に出ることのない深夜の世界に恐る恐るではあつたが、いけないことをしているような――胸の中がドキドキして、はちきれそうな高揚感でいっぱいだった。

迷うことなく彼女は公園の中心にあるすべり台に昇つた。かじかむ手でざらついた鉄筋を掴み、勢いよく梯子部分を駆け上がった。小さなすべり台であつたが、子供の夢海にとってはちよつと怖いぐらいの高さであつた。今、この公園の一番高いところに彼女は立っている。周りを一望した後、思い切り空を仰ぎ見た。

どこまでも高く広がる漆黒の空の中に――蒼白い満月が浮かんでいた。

彼女の目に映るその月は――母と眠れない夜にみたあの温かな、ぼんやりとした印象のものではなく――吸い込まれそうなほどの白さ、目が眩むような光を放っている。

その光は冷気のような冷たさに満ち満ちて、人々を包みこむような優しさなどは微塵も感じられない。

どれぐらい彼女は月に見入っていたであろう。ふと目尻に涙が浮かんでいたことに気づいて、彼女は視線を外して下を向いた。

途端に涙が止めどなく溢れてきた。

胸に渦巻いていたもやもやしたものが、どつと溢れてきたように――止まらず、声をあげて泣きじゃくった。

――母がいない。月を眺めるとき、必ずそばにいた母の姿がみえない。

胸の中にぽっかりと残った空洞は、今まさに彼女に実感を与えていた。

夜月の下に彼女はたった一人だった。

気付いたときは布団の中にいた。公園からの帰り道から布団に入るまでの一切が記憶になかったが、パリパリとした涙の跡はしっかりと顔に残っていた。顔を洗うこともなく、そのまま眠りに落ちていった。

――夢をみていた。

夢海は母の腕の中だった。母の顔をみたいのだが、どうにもまぶたが重くて目を開けることができない。しばらくすると母の腕から離れ、すべすべしたなかに自分がしがみついていることに気付いた。重いまぶたをあげると、一匹の白いイルカの背中の上にあった。夢海の乗っているイルカは上空を旋回していた。イルカの上から見下ろして

みると、夜の街並みが広がっていた。家々の明かりが点々と輝き、ときに様々な明かりが点滅を繰り返しては消えて、また繰り返しては消えて―クリスマスツリーのイルミネーションのような眩しさと彩りが広がるときもあり、また七色の輝きが波をうつときもあつた。

母の細い腕が自分の腰に回つてきた。背中に体温が伝わり、甘い匂いが鼻をくすぐつた気がした。母の顔がみたいと後ろを向こうとしたが、どうにも首が言うことをきかない。

「危ないから、ちゃんと前を向いていて―」母に言われて、彼女は姿勢を正して前をみる。

「―しっかりとまっついているのよ」

イルカが可愛らしい声をあげると、次の瞬間緩やかに上昇を始めた。風を切つて、厚い雲を何層もくぐりぬけていくと急に光が射しこんできた。その眩しさのあまり目を閉じると、母が声をかけてきた。

「もう大丈夫、ほら目を開けてごらん。とっても綺麗―」

夢海の目に映つたのは、どこまでも広がる暗闇を照らす数多の星々の光と、その中を優雅に泳ぎ回る無数の魚の群だつた。鱗に受けた星々の光は鋭く反射、拡散し、光の粒子のよう、光の点滅に眩しさを隠せない。その中に巨大な影が走つたかと思うと、頭上を巨大なクジラが光の噴出しながら泳いでいった。いつの間にかそばに現れたイルカの群は鳴き声を発しながら、夢海と母の周りを踊るように泳いでいる。そしてこの海を泳ぐすべてのものは、皆一様に月を目指している。

あの公園に描かれた絵物語が、目の前に広がり、彼女達もまた月を目指していた。

「ママ、ママ、すごい。月に行けるのね!」

「夢海、お月さまにいたら、好きなものなんでも買ってあげるわね」

「ホントに？ぜったいだよ。なんでもだよ！」

「約束するわ」

「じゃあ指切りしよ。約束だからね！」

「ええ、指切りしましょう」

夢海は母と向かい合おうとするのだが、どうしてまた体が言うことをきかない。次第と背中を感じる母の体温が遠ざかっていく感覚を覚えた。母の声も聞こえなくなってくる。必死で母を呼ぶ自分の声もだんだん出なくなってくる。視界に霞がかつていく。ぼんやりと、まぶたに重みがかかり、意識は下へ下へ……

月はすぐ目の前に迫っているのに――

ふと目が覚めた。まだ明け方は遠い夜半の刻であった。

懐かしい夢だった。同じ夢を何度もみる一人に言うときかれてしまうのだが、見てしまうものは仕方がない。

悪夢というほどのものでもないので辛いとも思わない。ただ少し寂しい気持ちが残るのはちよつと嫌だった。

ガウンを羽織つて玄関へ。靴下は履かずにスニーカーを履きつぶして外へ出る。

大人になった今もみる、あの夢。星々の海を母と一緒にイルカに乗って月に向かう夢。鮮明とまでは言わないが、はつきりと思い出せる。母が亡くなった満月の夜、はじめてみたときから、今まで何回みてきたことか。母を想い、涙で枕を濡らすなんてことは、さすがに大人になった今はないのだけど、不意打ちのようにみせられると

やっぱり寂しく感じるし、目尻が湿っぽくなることはないと言い切れない。

夢の内容はいつも変わることはない。振り返り母の顔をみることなく、月にたどり着くことなく、夢は終わる。その先、月に着いたら母の顔をみる事ができるのだろうか——何度となく夢の続きを求めたが、そうは先をみさせてくれないらしい。

今でも眠れない夜は月を眺めに外へ出る。おまじないが効いてくれるせいか、自然と睡魔はやってきてくれる。

今夜も静かな闇が広がっている。吐く息が一層白くみえる。

月は同じ表情をしてはくれない。いつだって気分屋である。

思い出として残っている、あの公園からみた月は蒼白く、巨大で不気味なものだった。あれほどの——今だからこそ感じる狂気のオーラに満ちた月に——私は確かに魅入られて、突き放されて、思い知らされた。

曇りがちの夜空を見上げると、しかし存分にお月さんは顔をのぞかせている。張りつめたガラスのような冬の空気に月明かりは反射して、地表を淡く照らしている。

月は表情を変えるが、形が変わることはない。いつだってその形は変わらないまま私の目に映っている。

欠けることを知らない満月が浮かんでいる。